

「御～様」表現の史的考察：「ねぎらい」表現の変遷から

宅間, 弘太郎
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9375>

出版情報：語文研究. 88, pp.45-58, 1999-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「御く様」表現の史的考察

——「ねぎらい」表現の変遷から——

宅 間 弘 太 郎

一 はじめに

ねぎらいや気遣いの表現として、現代日本語においては「御疲れ様」「御苦労様」「御気の毒様」などの「御く様」形の表現が頻繁に用いられている。この表現形は、日本語史上において、いつごろ、どのように現れたのであろうか。本論文では「ねぎらい」表現に注目し、「御く様」形出現の前後において、「ねぎらい」表現を中心とした気遣い表現がいかに変化したか、その境となる近世期の資料を用いて明らかにし、「御く様」表現の出現の様相について考察を行う。また上述した「御く様」用法自体の性質、および変遷についても、近世から近現代の用法をたどることによって考察を行いたい。

二 「御く様」表現について

二、一 「御く様」表現とは

「御」「様」はどちらも、日本語の中でも代表的な敬語接辞である。前者は種々の語に接し、その語の指す人物や所有者を高めたり、丁寧な言い方を実現するものであり、かなり古い時代から用いられてきたものである。また後者も、上位待遇者を直接言語表現するのを避けるという敬語表現の原理によって、もともとは「様態」「様子」の意を持っていた「様」が、主に人物を指す語の後に接し、敬意を表する用法を持ったものとみられる。故に、「御く様」という表現形は、基本的には人物（あるいは人格を持つもの）をきわめて高く待遇する敬語表現であるということが出来る。

その中で、やや異なった用法ともいうべき「御く様」の用法が見られる。聞き手へ、ねぎらい、氣遣いの意を表す用法の「御疲れ様」「御苦勞様」「御氣の毒様」などの「御く様」である。ここではこの用法を仮に「特殊用法」^(注1)と呼ぶことにする。また、人物を高める用法を「基本的用法」とし、以下具体的な語例を示す。

二、二 基本的用法

(i) 「お父様」「お母様」「お姫様」「お侍様」……

(ii) 「御内裏様」「御出居様」「御部屋様」……

(i) に示した用例について見ると、「御く様」の付された語は、「父」「母」「姫」など、直接に人物を示す意味を持つているものである。それらの語に「御」・「様」という敬語接辞を用いることによって、当該の人物を言語的に高く待遇するという用法である。人物待遇の敬語表現として、いわゆる尊敬語的用法としてポピュラーな用法であり、これが「御く様」の基本的な用法である。(ii) に示した用例について見ると、「内裏」「出居」「部屋」などの語に「御く様」が付している。これらの語は第一義的には人物を指し示す意味は持たないが、いずれも当該の場所に存在・居住する人物を間接的に示し、結局はその人物を高く待遇している。よってこれらも

「御く様」用法の基本的用法と考えてよい。

二、三 特殊用法

特殊用法とは、最初に示したように、ねぎらい・氣遣いを聞き手に表現するために特化した「御く様」形表現である。これらの表現は、いうまでもなく先述した「基本的用法」のように、人物を高める意味を担うことはない。基本的用法にて用いられるものが、人格を保持し動作主として用いられるのに対し、特殊用法の「御く様」は、動作主として用いられることがないのも、それらの違いを物語るものである。すなわち、特殊用法の「御く様」は、何らかの応対・挨拶専用の応答語として、独立的に用いられるのである。

おたがいさま「御互い様」、ごちそうさま「御馳走様」、
ごしゅうしょうさま「御愁傷様」、ごくろうさま「御苦勞様」、おまちどおさま「御待遠様」、おきのどくさま「御氣の毒様」、おあいにくさま「御生憎様」、おかげさま「御蔭様」、おはもじさま「御は文字様」^(注2)、おそまつさま「御粗末様」、はばかりさま「憚り様」、おせわさま「御世話様」

以上は『逆引き広辞苑』から、特殊用法として認められる

「御々様」用法を抽出したものである。他にも「御疲れ様」「御面倒様」「御邪魔様」「御親切様」…などが、現代語で使
用されるものと考えられる。

特殊用法の発生は近世期以降、おおまかには近世期後半・
十八世紀末以降と考えられる。その発生の前後の「ねぎらい
表現」の様相を調査することによって、特殊用法「御々様」
の発生について考察を行いたい。

三 「御々様」表現以前のねぎらい表現

特殊用法の「御々様」表現が登場するのは、後に見るよう
に近世期後半になってからである。ここでは「御苦労」など
の語彙を中心として、それ以前の「ねぎらい」の表現はどの
ようなものであったかについて述べる。

三、一 調査上の問題

資料を調査してみて感じたことは、予想以上に「ねぎらい」
表現とおぼしきものが見つけにくかったということである。
今回の調査では、対話形式が多く現れることが予想される、
中世・近世の口語資料として狂言台本、および浄瑠璃台本・
歌舞伎脚本を調査資料として中心に用いた（一覽を末尾に掲
載している）。しかし、予想していたより「ねぎらい」表現と

認められるものは多く見つけることはできなかった。このこ
とにはいくつかの要因が考えられると思われる。

まず考えられるのは、資料性そのものの性質の問題であ
る。現在調査することが可能な、文字によって書き残された
資料のうち、今回は上記のように対話形式が多く現れること
が期待される口語資料を調査した。結果、そこでは予想以上
に「ねぎらい」表現を見出すことが難しかったのである。し
かし、当時の実際の言語生活を考えてみると、本場に「ねぎ
らい」表現が行われていなかったということはやや考えにく
い。我々が現在見ることのできる日本語の資料上に、「ねぎら
い」の場面が単に残されることがなかった、という可能性も
考えられる。

ただし一方で、実際に「ねぎらい」表現そのものが比較的
行われにくかった状況というものも、考えられるのである。
このことは敬語史および敬語生活史、また実社会の身分制度
保持の度合を考えると、充分予想されることである。

現代語においては、我々は最初に述べたように、相手の骨
折り行為に対して、ねぎらいの言葉をいろいろな場面で用い
ることができる。自分より目下の人物に対して用いることは
もちろん可能である。上位者への言語表現としては、やや耳
に障る感もあり、規範的な用法とは言えないかもしれな
い^(注)が、目上の人物に対しても、ある種のねぎらい表現を行うこ
とは可能、もしくはかなりの度合で許容されると言え

る。これは、社会的に厳格な身分関係が薄れてきたこと、同時に待遇表現においても絶対的な待遇表現運用が相対的な待遇表現運用に変化したことによるものと思われる。

しかし、やはり近世以前の当時の社会構造・身分制度を考えてみると、未だに強い身分意識が存在し、そしてそのことは待遇表現の運用にも色濃く残っていると言える。このことにより、現代のような「ねぎらい」表現は行われにくかったということが考えられるのである。少なくとも自分より上位者に対してねぎらいの言葉をかけることは考えられないであろう（現代語にて、先述のようにやや規範的でないと考えられることから充分推測できる）。また、上位者から下位者に対して、現代語と同じような意識でのねぎらいというものがあったかどうかは一考するべきである。

三、二 近世期前半のねぎらい表現

以上のような状況であったことを考慮し、ここでは近世期前半の「ねぎらい」表現を見てみたい。以下に用例を掲げるが、口語の世界ではねぎらい表現として「御苦労」「大儀」などの語が中心として用いられていたようである。より頻繁に、そして広く用いられていたと思われるのが「御苦労」であるが、「御」がつきながらも、単独ではねぎらい表現として「丁寧さ」に不十分であったらしく、以下の通り「御苦労千万

／＼に存じ奉る」などのように使用されるのが多かった。

文と聞くより飛たてど人目のあればしとくくと。「ホヲ、いつもながら与勘平大儀」と計とく紐も。…

〔芹屋道満大内鑑〕享保十九（一七三四）（竹田・並木）

「是はく照綱殿御同道と存じたれ共老足のはか行かず。却て御めんどとうとそろくお先へ参つた。親王の仰とは申ながら遠所の所御苦労千万。是は保意が後家御存の通拙者が妹。次は神お見知なされて下されふ」（榊乾平馬↓左近太郎照綱）

〔芹屋道満大内鑑〕享保十九（一七三四）（竹田・並木）

「これはくお久しや薬師寺様。ひよんな事が出来いたし、おまへにも御くらう。扱きのどくなは私。…」（たへまごぜん↓薬師寺次郎左衛門公義）

〔狭夜衣鴛鴦剣翅〕二元文四（一七三九）（竹田・並木）

「先以今日の御参詣私ならぬ公用。近此御苦労千万」（清水寺住僧↓園辺左衛門）

〔新うすゆき物語〕寛保元（一七四一）（竹田・並木）

「此度娘薄雪と。園辺の左衛門に御せんぎ有て。只今皆々来られつゝしんで承れ。民部殿大膳殿御苦勞さぶ。いざ先づ是へ」(伊賀守↓民部大膳)『新うすゆき物語』寛保元(一七四一)(竹田・並木)

「御上使様には御苦勞千万に存じ奉り升る」(佐々木丹右衛門↓管領細川齋政元の妻・浜町)

『伊賀越乗掛合羽』安永五(一七七六)(半二・江戸)

関連するものとして、「御蔭」「御世話」などの用例も掲げておく。

「ヤアさ扱々嬉しや忝や。是もひとえにあなたのおかげ。お礼く」(与勘平↓葛の葉)

『芦屋道満大内鑑』享保十九(一七三四)(竹田・並木)

「さやうでござります共。おいさまやばゞ様のおかげで大ききもなり。きりやうもあがる。十一のとしよはで。わたしがせほどになりました」

『狭夜衣鴛鴦剣翹』元文四(一七三九)(竹田・並木)

「おなじみとて捨置かれず。段々の御せわお礼は詞につ

くされず。此上ながら御前の首尾よろしう頼み上まする」(照綱↓好古)

『芦屋道満大内鑑』享保十九(一七三四)(竹田・並木)

「お前のいかひお世話に成ましてござり升る。それゆへ今日まで渡世仕りました」(唐木政右衛門↓葉屋)

『伊賀越乗掛合羽』安永五(一七七六)(半二・江戸)

四 「御く様」発生以降

先に述べたように、特殊用法の「御く様」が発生したのは、近世期後半以降と思われる。以下ではその用例について検討したい。

四、一 接続語彙一覽

まず、今回調査した資料の範囲で、どのような語に「御く様」が接した例が見られたか、その語彙一覽を掲げる。

近世後半——「苦勞」^(註)「世話」^(註)「かげ」^(註)「機嫌」^(註)「退屈」^(註)「嬉し」^(註)「はばかり」^(註)

明治時代——「蔭」「苦勞」「世話」「生憎」「気の毒」「待

ち遠「邪魔」「迷惑」「馳走」「尤も(道理)」「

「退屈」「匆々」「粗末」「楽しみ」「愁傷」

「草臥(くたびれ)」

大正時代——「蔭」「苦勞」「世話」「生憎」「氣の毒」「待

ち遠」「退屈」「馳走」「粗末」「互」

四、二 近世期後半の状況

特殊用法の「御く様」が登場しはじめるのは、十八世紀後半の時代からである。今回調査した資料の中で、特にその用法が多く見られたのは、町人の日常会話をなまの形でとり扱っていると考えられる「漸本」である。ここではその様子を中心に概観したい。

《御苦勞様》

…ぶがんにない時でさへ文盲な私、顔見世の口上ならば、チ、チン／＼の無間の鐘でも語りませうけれど、とんと何にも才かくが起きませぬが、漸く若ひとき聞て置ましたゑらいゑい漸を、一つ思ひ出しました。お御苦勞様ながら、夫なと書て置しやつて下さりませ。(大尾の口上)

『鳩雀雑話』四 大尾 乍憚口上、寛政七(一七九五)

京 菱屋孫兵衛等板)

茂 おれも今まで挨拶ごともいろく頼まれたけれど、うハばミのはらの中へ、あいさつには入た事ハ、こんどはじめてじやが、マアく口をあかんせ それハ大キに御くろうさまでござり升ト口を明ければ、茂助ハうハばミの口の中へとびこみ、腹の内へ行、両方をミれば、まんざら知らぬ顔でもなく、引わけて、…(うはばみ↓茂助(仲裁役を頼まれる))

『落嚙千里藪』 出雲の手帳はづれ

天保十二(一八四一) 花枝房円馬作・大坂 播磨屋新兵衛板)

○イヤく、そふでない。此様に風が吹ば、此方も随分精に入て廻らねバナらぬ。○コレハく大きに御苦勞様。イヤ申、五介さん。旦那様が御出なされた。○丁代五介飛で出、コレハく旦那様。お勝なされぬに御苦勞様。只今私が廻りましてござり升。もふあなたハ御無用ニなさりませ。(丁代・五助↓旦那)

『慶山新製曲雑話』二 用心藏 寛政十二(一八〇〇) 浪速 池内八兵衛等板)

《御世話様》

そんなら幸、けふ八日もよし、早掃除もしてあれバはい
るばかりと、宿ばいりやら家わたり粥やら。扱く大に
御世話さまと、コトくいふて悦び、時に、迎もの事に、
今夜仲間内三人よびたふムり升といへバ、貴さま、よ
う合点してミヤ。(息子にとりついた)狸↓父親)

〔新嘶庚申講〕間に合小祠 寛政九(一七九七)慶山等
合作・浪華 浅田清兵衛板)

：是をきつけ、村の老分来たり、おやぢ これハく
浪花の御客さん。おけい御世話さんでござります。モ
ウ此間から、あの若い者等がよつて、毎夜くぢやく
といふばかりで、とんと煮るといふことがない。(村の老
分↓作者)

〔小倉巨首類題話〕中納言行平 文政六(一八二三)独
醉序・浪華 河内屋平七板)

久作「何かとお前様、いかいお世話様でござります」
(歌舞伎『お染久松色讀販』文化十(一八一三)江戸森
田屋上演)

《御蔭様》

それ 両どなりハ、ばたくどさくと一度のさハぎ。
隠居ハ妾とさやくき合て大に悦び、やがて隠居ハかへり

がけに、ヲ、大七どの。はや御とりかたづけかな イ
ヤモ、おかげさまで、さつそく引こしてござり升マア
くめでたいく。(隠居↓大七)

〔落嘶顯掛鎖〕五・これは尤 文政九(一八二六)和来
山人・京 山城屋佐兵衛等板)

以上のように、現代語とほとんど同様の、「ねぎらい」の意
を表す「御く様」表現が見られるようになる。「嘶本」におい
ては上方資料に出現する偏りが見られるようであるが、江戸
においてまったく見られないというわけでもないようであ
る。後に考察する次の明治時代においても、地域による偏り
はそれほど見ることはできない。

また、現代語ではほとんど見られない「御く様」表現が散
見される。以下の用例を参照されたい。

《御機嫌様》

実語教にも、詞多きハ品すくなしと有て、其べりくと
しやべる口の軽ひものは、あまざけのごとしと教訓最
中、在へ帰て居る乳母、重箱よふもの風呂しき二つ
ミ、是をさげて門口より、うば はいく、旦那さま。
御機げんさんにござり升か。ぼん様も大きうおなりなさ
れましたナア(乳母↓旦那)

〔春興嘶万歳〕早合点 文政五（一八二三）桂文来作・大阪 吉文字屋莊助等板

《御退屈様》

ついで此頃ハ芝居通が、はまらねへ役を悪日だといひやすが、そこからでた通言だらうねさやうく。時に今の高嶋やの役ハ、チトはまらねへぢやアないか わたしもさう思ひやした。大キに悪日だねト咄しのきつかけに、中ぎくのわかいもの、ヘイ、御たいくつま（若者↓見物人）

〔追善落語梅屋集〕芝居 慶応元（一八六五）

四、三 明治・大正期の状況

明治・大正時代になると、「御く様」表現については、用例の頻度や、接続する語彙の幅広さなど、ほぼ現代と同じ様相ということが出来そうである。

《御苦勞様》

主人は雑誌を投げ出した。

「では行くかな。とうとう引張出された」

「御苦勞様」と野々宮さんが言った。女は二人で顔を見合せて、他に知れない様な笑を洩らした。庭を出るとき、

女が二人つづいた。（野々宮↓広田先生）

〔三四郎〕夏目漱石、一九〇八）

「成程、いや、お茶も差上げませんで失礼ですが、手間が取れちゃ又お首尾が悪いと不可ません。直ぐに、是から、」

「何うぞ然うなすって下さいまし、貴下、御苦勞様でございますねえ。」

「御苦勞処じゃありません。さあ、お供いたしましたしよ。う。」（道子↓早瀬）

〔婦系図〕泉鏡花、一九〇七）

《御陰様》

……私は姉様に成代ってお世話をしたのです」と口真似をして、「そうさ、姉様に成代って飛んだお世話をしてくれたのさ。私はね、お礼を言うよ。お蔭様で亭主一人形なしにしてしまいました」と間を置いて、口惜しそうに、「なんの、あんな人に些とも未練は有りゃしない。そんなに欲しきゃ、くれてやるから、何処へなと連れてツちまえ！」（時子↓小夜子）

〔其面影〕二葉亭四迷、一九〇六）

《御気の毒様》

女が帰って行くとき、お島はいきなり帳場の方から顔を
出して行った。

「お気毒さまですがね、宅はお花なんか習っている隙は
ないんですから、今日きり私からお断りいたします」

お島は硬ばった神経を、強いておさえるようにして、
そう言いながら謝礼金の包を前においた。(お島↓女)

『あらくれ』徳田秋声、一九一五)

《御生憎様》

…源さ、お入りや。なんだって障子の外からなんぞ覗く
んだえ」

と声を掛けましたのは鹿の湯の女亭主です。源は煤けた
障子を開けて、ぬっと蒼ざめた顔だけ顕しながら、

「私は女衆ばかりかと思って」

「女衆ばかりかと思ったら——御生憎さま」(女亭主↓
源)

『藁草履』島崎藤村、一九〇二)

《御待ち遠様》

「まあ待っていらっしやいよ。美くしい髪ですね。腰ま
でありますよ。少し仰向いて恐ろしい脊の高い女だ事、
然し美人ですね」おい御見せと云ったら、大抵に見
せるがいい」と主人は大に急き込んで細君に食って掛

る。「へえ御待遠さま、たんと御覧遊ばせ」と細君が鉄を
主人に渡す時に、…(細君↓主人)

『吾輩は猫である』・六 夏目漱石)

ただし以下のように、現代語においては、用いられにくい
のではないかと感じられる用例も見られる。

《御退屈様》

…：奥さんこの猫は油断のならない相好ですぜ。昔しの
草双紙にある猫又に似ていますよ」と勝手な事を言いな
がら、頻りに細君に話しかける。細君は迷惑そうに針仕
事の手をやめて座敷へ出てくる。

「どうも御退屈様、もう帰りましょう」と茶を注ぎ易え
て迷亭の前へ出す。「どこへ行ったんですかね」「どこへ
参るにも断わって行った事の無い男ですから分りかねま
すが、大方御医者へでも行ったんでしよう」(細君↓迷
亭)

『吾輩は猫である』・三 夏目漱石)

《御道理様》

哲也は眉を顰めて、「君も余程邪推深いねえ。あれ程僕
がそんな事はないと言ってるじゃないか。そんな乱倫な
——大抵考えても分りそうなものだ」

「へいへい、御道理様（ごもっともさま）でございます……君も余程捌けねえ男だ。これ程此方が砕けて出たら、もう好加減に暴露して言っちゃっても好さそうなものだ、……」（葉村↓哲也）

〔其面影〕二十九 二葉亭四迷、一九〇六

《お楽しみ様》

「此方へ！ お待ちかねですよ」と歎嗔れた声がする。

手探で二足ばかり進むと、誰やらの骨ばった手が私の手を把る。

「貴女はフラウ・ルイゼですか？」

と尋ねると、そのしわかれた声が、

「はあ、そうですよ。お楽しみさま、へ、へ、へ」（老婆↓私）

〔くされ縁〕十五 二葉亭四迷、一八九八

なお現代の用例については、第二節第三項に掲げた一覧を参照されたい。

五 まとめと考察

特殊用法「御く様」の語彙や用例についてはこれまでに挙げた通りである。発生前後の様相を検討することによって、

特殊用法の「御く様」の成立のきっかけ、および変遷についての考察を行いたい。

五、一 「御く様」表現発生の要因

特殊用法「御く様」の発生の要因として、次の二つの要因が考えられる。

(一) 敬意遞減による、敬語接辞の添加、ならびに「様」の人称指示効果

特殊用法「御く様」発生前の用例として、主にねぎらい表現である「御苦労」「御蔭」「御世話」などを先に掲げたが、特殊用法「御く様」を実現する語彙は、すでに「御く」の語が尊敬語、あるいは丁重語として十分に熟合しているものに限られている。その逆の「く様」が先に成立し、それに「御」が冠して成立したというものは見られない。

これは、「御く」として、尊敬・丁寧用法として用いられていた語彙に限定して、さらに「様」を付加したものと考えられる。「御く」で表現されていたねぎらい表現その他は、敬意遞減の法則により、従来の「御く」のみの形式では、十分に被待遇者（この場合には聞き手）への言語的な待遇価値を持ち得なくなっただのではなからうか。

「御苦勞（であった）」||（尊大）

このように、例えば「御苦勞」あるいは「御蔭」などのみでは、十分な丁寧さが得られなかったのではないかと考えられる。特に「御苦勞」などは、従来上位者から下位者への伝統的なねぎらい言葉として使用された言葉であるので、そのままではやや尊大な語感がぬぐえなかったのではないだろうか。

「御苦勞で御座います」↓「御苦勞様で御座います」

このように単純に「様」の添加のみ行われたような形にも見受けられるところもある。単純に、敬意や丁寧さの付加としては、「様」の選択される必然性はない（ただ、「御」がすでに冠しているの、さらに語頭に何かを冠することは出来なかつたとも考えられる）。このとき、「様」の用法として、敬語接辞として人物に準ずるものに付く用法（基本的用法）が普及していた。そして「様」を付した言葉は、この敬語接辞の用法の「様」にしたがい、強い人物（人格）指示性を帯びることになり、それはねぎらい・氣遣い表現としてよりふさわしい、聞き手（||相手）という対人に、より焦点を当てる表現になったと考えられるのである。

「御氣の毒でしたね」（氣の毒な事態そのものの言及）

「御氣の毒様でしたね」

（氣の毒な事態に陥った相手を主眼とする言及）

「お生憎です」↓「お生憎様です」

「お蔭で」↓「お蔭様で」

「お邪魔でした」↓「お邪魔様でした」

（二）「様」添加による、言いきり表現としての効果（手輕さ）

ねぎらい・氣遣い表現には、「ご苦勞様」「お疲れ様」「お氣の毒様」などの「言いきり」の形（主に応答の語として）が多用される。この理由についても考えてみたい。

先に掲げた「御々様」発生以前の用例を検討すると、「御苦勞に存じます」「御苦勞でございませう」などの形の用例が多くみられる。「存じます」「ございませう」など、どちらも聞き手に対する謙讓・丁寧表現であり、かなり聞き手への配慮を伴った表現であるということが出来る。この点では後の「御々様」と同じ性質を持っている。ということは、「存じます」「ございませう」の部分が、「々様」に取って代わられた、と考えることが出来るのではないだろうか。

もちろん、ただ単純に双方が交替したというのはそのまま

では受け入れられるものではない。それぞれ根本的には、異なる意味・機能を持つ言葉だからである。基本的には(一)で掲げた理由により「様」付加の契機が生じた。しかし同時に、「様」付加によって必要十分な丁寧さを帯びることになり、それにより「存じます」「ございます」の単なる「みとめ」表現部分の省略が可能になったのではないか。「存じます」「ございます」といった、従来の堅苦しい表現を用いることなく、「御苦労様。」などのように、「様」を付すことで、言いきりという形で簡便に、しかも十分に礼を欠かないねざらゝい・氣遣い表現を実現することが出来たと考えられるのである。

旧表現「御苦労に存じます」「御苦労で御座います」

←

新表現「御苦労さま。」「御苦労さま。」

いずれにしても特殊用法「御く様」は、特に言いきりの形は、話し手と聞き手の間に極端に身分の格差がある場合には使用されない。ある程度対等・近い関係にある両者の談話内で、聞き手である相手へのねざらゝい・氣遣い・丁寧さを表現するための手軽な格好の表現法である、と云えないだろうか。

この「聞き手への氣遣い」というのが特殊表現「御く様」

表現の本領である。ある人物を言語的に高く待遇する、基本的用法(尊称用法)の「御く様」は、聞き手以外の第三者を示し、高く待遇することがもちろん可能である。しかし特殊用法「御く様」は、主に目の前に存在する聞き手に対して用いられるのであり、目の前にいない第三者への尊称用法としては解釈できないことから、このことが認められるのである。

五、二 「御く様」表現の定着

登場以来現代にいたるまで、特殊用法「御く様」は、相手へのねざらゝい・氣遣いを表す表現として日本語に定着してきた。先に見た通り、「御疲れ様」「御互い様」などは、比較的新しく生じた用法であり、生産性を持っていたものと思われる。ただし、「御くで御座いました」形などの表現も後まで根強く残っており、「御く様」表現が完全に交替したのではない。「御く様」表現は話し手によって恣意的に選ばれる表現形式であり、その選択理由としては、上記のように、聞き手への氣づかい表現を人称指示性の強い「様」を用いて行う、もしくは身近なものに、より簡便に氣づかう氣持ちを伝えられる形式として「御く様」を選択する、のいずれかの意識が働くものと考えられるのである。そうでない場合ももちろん想定できる。すなわち、言語的および社会的に話し手・聞き手

の格差が大きいと意識されるような場合である。このように高い敬語待遇が求められる状況においては、簡便なねぎらい・気遣い表現では間に合わず、依然「御く(様)」に存じませす/でございます」の形が使用されるであろう。

「御機嫌さま」「御退屈様」「お楽しみ様」「御もつとも様」などの、かつては文献にてその用例が確認ができるものの、現代では耳慣れなくなってしまう用法もある。より直接的に、聞き手の負担(それに対する気遣い)を述べる語彙(「疲れ」「苦勞」「気の毒」「愁傷」など)に偏って用いられるようになる、という様相を次第に見せているように見受けられるが、今回は明らかにできなかった。今後の課題としたい。

六 おわりに

ここで取り扱った特殊用法「御く様」は、「御」「様」という日本語の代表的な敬語接辞を用いた表現でありながら、堅苦しくなく簡便に相手にねぎらい・気遣いの気持ち伝えるものとして機能している。特に現代語においては、挨拶語としての機能も含めて、この傾向が強いと思われる。日本語に十分浸透した敬語接辞用法から発生した、一つの用法として考えたい。

この堅苦しくなく、簡便に相手をねぎらい、気遣う表現が出現してきた背景についても、考えをめぐらせる必要がある

かと思われる。すでに述べたように、特殊用法の「御く様」が出現したのは、近世期後半であった。この時期に「御く様」表現が出現し、そして現代にわたって広く用いられていることの意味も考えていく必要があるかと思う。このことについて、敬語史論を含めた、日本語におけるコミュニケーション史、言語生活史、社会言語学史にかかわる問題として、「御く様」表現の位置付けを捉えなおすべきと考え、こちらでも今後の課題とするものである。

注1

ここで「特殊用法」という語を用いるのは、第五節でも詳しく述べるように、もともとの「基本的用法」である「御く様」の敬語接辞用法とは趣の異なる性格のものだからである。「基本的用法」を参照して発生したものは考えられるが、敬語接辞用法としてその体系を継承したものではなく、あくまでもねぎらい・気づかい・挨拶のための一つの「特殊な」用法であると見るべきであろう。

2 いわゆる「女房詞」の一種である。いろいろな語に「くもじ」を付けて、そのものを婉曲的に表す用法であり、ここでは取り扱わない。

3 例えば、目上の人に対して「お疲れ様でした」ということが可能かどうか、意見が分かれるところであろう。目上の人が「お疲れ」である状態を把握し、それを言語上で表現することと自分が、失礼にあたるとも考えられるのである。

4 「お嬉しさま」として、次の用例がある。

内儀はあつと謙葉に穂長折敷く橙柑子。蜜柑や何やかや勝

栗おゆかしや／＼。ひさしぶりで御無事なお顔お嬉しさま
やと出でければ、伊左衛門とかうの挨拶遅くみ。

〔夕霧阿波鳴渡〕上 近松門左衛門 正徳二（一七二二）

この用例はその他の特殊用法の「御／＼様」とは、さらに趣
が異なる用法である。本文中で述べたように、特殊用法の
「御／＼様」発生の大体の時期は、近世後半、十八世紀末であ
ると考えられ、その点から考えても、この近松の用例は、本
稿で取り扱う特殊用法の「御／＼様」表現の範疇には入れない
ことにする。しかし、この表現の発生について、考慮すべき
用例ではある。

5 「御」のつかない「はばかり様」という用例が見られる。

「おかみさんエ。此お子さんにはおあつうございませうから
水をうめて上ませう。サア／＼。此方へお這入なさいまし」

「これは／＼はゞかり様。お手をいたゞきます」

〔浮世風呂〕三・下 式亭三馬 文化六／＼九（一八〇九—
一一）

これは「御」は冠しないものの、相手の気遣いに対しての
礼・あるいは恐縮の言葉であり、特殊用法の「御／＼様」表現に
通じるものがある。この「はばかり様」は、明治時代において
も散見される。

《参考文献》

- 大岩正伸（一九六四）「御——用法と意味——」（『国語学』五八）
辻村敏樹（一九六八）『敬語の史的研究』東京堂出版
辻村ほか（一九七二）『講座国語史五 敬語史』大修館書店
森田良行（一九八九）『基礎日本語辞典』角川書店

菊地康人（一九九四）『敬語』角川書店

『国文学 解釈と教材の研究』一九九九年五月号（特集 あいさつこ
とばとコミュニケーション）

・調査資料は、以下のとおりである。

『天草版平家物語』勉強社文庫

『天草版伊曾保物語』井上章編 風間書房

『大蔵虎明本狂言集の研究 本文編』池田廣司・北原保雄著
表現社

『近松浄瑠璃集・上下』『歌舞伎脚本集・上下』（岩波 日本古典
文学大系）

『上方歌舞伎集』『江戸歌舞伎集』竹田出雲・並木宗輔 浄瑠璃
集』近松半二・江戸作者 浄瑠璃集』（岩波 新日本古典文学大
系）

『喃本大系』（東京堂出版）

『CD-ROM 版 明治の文豪』（新潮社）

『CD-ROM 版 大正の文豪』（新潮社）

※本稿は、平成十一年九月二十六日に行われた、第四十九回西日
本国語国文学会にて発表したものをもとにまとめたものである。
席上、関一雄先生をはじめとして、談話の中でも多くの先生にご
教示を賜わった。記して感謝申し上げます。

（たくま こうたろう 九州大学大学院博士後期課程）